

「真仏弟子」 釈について

善導の『往生礼讃』からの引用①

原文の書き下し：また云わく、仏世、甚だ値い難し、人信慧有ること難し。遇たま希有の法を聞くこと、斯れ復た最も難しとす。自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中に転た更難し。大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る、と。(『聖典』247頁)

DTS: 〈And again:〉 It is a rare event to meet the Buddha while he is here. It is also rare to find beings who are endowed with faith and transcendental wisdom. The rarest event is to listen to the most wonderful doctrine [of the Pure Land]. But the rarest of the rarest is to believe in the doctrine and also to have others believe. Propagating as universally as possible the message of great compassion is indeed the truest way to requite what the Buddha has been doing for us. (p. 156)

CWS: Further, he states: Extremely difficult is it to encounter an age in which the Buddha appears, / And difficult indeed for a person to realize the wisdom of shinjin. / To come to hear the dharma rarely met with / Is again among all things most difficult. / To realize shinjin oneself and to guide others to shinjin / Is among difficult things yet even more difficult. / To awaken beings everywhere to great compassion / Is truly to respond in gratitude to the Buddha's benevolence. (pp. 120)

Inagaki: He also says: It is extremely difficult to encounter an age in which a Buddha appears in the world; / It is also difficult for the people to realize the wisdom of faith. / To be able to hear the rare Dharma / Is among the most difficult. / To accept it in faith and teach others to believe in it / Is the difficulty among all the difficulties. / To spread great compassion everywhere and guide others / Is truly to repay the Buddha's benevolence. (p. 129)

Yamamoto: Also line are, which say: "Hard is it to be born where the Buddha is; / Hard to obtain faith and the wisdom that rings; / Hard to hear this Law, this Law so rare: / This is the hardest of all, of all things. // "To have faith and other well to teach / Is difficult, the hardest thing of all. / His Great Grace we spread and we widely teach. / Thus one repays Him well who does us call. (pp. 133-134)

試訳

Further, he states: It is extremely difficult to directly encounter a Buddha in the world. For a person to have acceptance and wisdom is difficult. Happening to hear the rare Dharma: This is also held to be the most difficult. Accepting it oneself and leading others to accept it: Among difficult things, this is yet even more difficult. Great compassion universally transforming all things is what truly ends up repaying our debt of gratitude to the Buddha.

善導の『般舟讚』の原文（訂正）

「唯恨衆生疑不疑 淨土對面不相忤
莫論彌陀攝不攝 意在專心回不回」

（『大正大藏經』四七・450 上段、『真聖全』一・695 頁）

「一入不退至菩提
寶地寬平衆寶間 一一寶出百千光
一一光成寶臺座 光變爲樓百千億
化天童子無窮數 悉是念佛往生人
或登寶座樓中戲 不飢不渴湛然常
或入光明百寶殿 正值大會讚彌陀
或道從今至佛果 長劫讚佛報慈恩
不蒙彌陀弘誓力 何時何劫出娑婆
自到已來當法樂 畢竟不聞十惡聲
眼見如來耳聞法 身常從佛喜還悲
何期今日至寶國 實是娑婆本師力
若非本師知識勸 彌陀淨土云何入」

（『大正大藏經』四七・451 頁上段、『真聖全』一・700 頁~701 頁）

「知恩報徳の益」に関する金子大栄師の気づきについて

「今朝ふと、知恩報徳の益とってある—知恩報徳ということは御利益だといつてあります—これはひとつ氣をつけて見なければならんことであるな、と氣がついたのであります。知恩報徳ということは、仏法を聞いた者の一つの道徳である。御恩を知り徳を報じねばならない。第一の冥衆護持の益は別に義務的なものでない、心多歡喜あたりは喜ばなければならんということであるかもしれんけれども、諸仏稱讚の益、心光常護の益ということは、そうならしていただくということであるから御利益に間違いないのであります。ところが知恩報徳ということになると、世の中には報恩主義ということをする人もありまして、御恩をありがたく思うというところに人間の道があるのである、こういうことなんですから、知恩報徳というものは人間の道である、こうありそうなところを、知恩報徳の益とってある。

知恩報徳というのは御利益である。そうしますと、私が申しましたように、恩を忘れ徳を報ずる心がなくなったというて悲しむ必要はないことである。ほんとうに御信心をいただいて、本願のこころをいただいて念仏申す身になれば、別に知恩の心が出てこなくても、報徳の感情が消えても、それが知恩報徳の御利益である。そこにもう恩を知るとか徳を報じるとかいわなくても、念仏申す身になるということにおのずからそれがそのまま知恩報徳の道にかなえさせていただくのであるとい

う御利益であるのである。御利益という言葉で何か一つ生きかえったような感じがするのであります。(金子大栄著『現生十種の益』(弥生書房) 170 頁~171 頁)

善導の『往生礼讃』の原文について

「佛世甚難値 人有信慧難
遇聞希有法 此復最爲難
願共諸衆生 往生安樂國
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛
自信教人信 難中轉更難
大悲傳普化 眞成報佛恩」

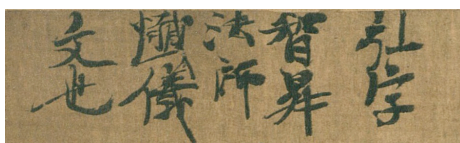
(『往生礼讃』『大正大藏經』 47 卷 442 頁上段)

『大無量寿経』における「難信」について

「寿命は甚だ得難し。仏世また値い難し。人、信慧あること難し。もし聞かば精進して求めよ。法を聞きて能く忘れず、見て敬い得て大きに慶べば、すなわち我が善き親友なり。このゆえに当に意を發すべし。」(『聖典』 50 頁~51 頁)

「仏、弥勒に語りたまわく、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これまた難しとす。もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。このゆえに我が法、かくのごとく作し、かくのごとく説き、かくのごとく教う。まさに信順して法のごとく修行すべし。」(『聖典』 87 頁)

「化身土巻」における親鸞の注記について



(『定本教行信証』 307 頁参照)

「功德」の意味と英訳について

「然るに今且らく其の名字を積すべし。其れ功德は亦た福德と名づく。福は福利を謂う。善、能く資潤して行人を福利するが故に名づけて福と為す。是れ其の善行の家の徳なるが故に福德と名づく。清冷等は是れ水の家の徳なるが如し。功は機能を謂う。善、資潤利益の功あるが故名づけて功と為す。還た是れ善行の家の徳なるが故に功德と名づく。」(慧遠『維摩義記』 (『大正大藏經』 38 卷 429 頁上段)

「悪尽くるを功と曰い、善、満つるを徳と称す。又、徳とは得也。功を修して得る所な

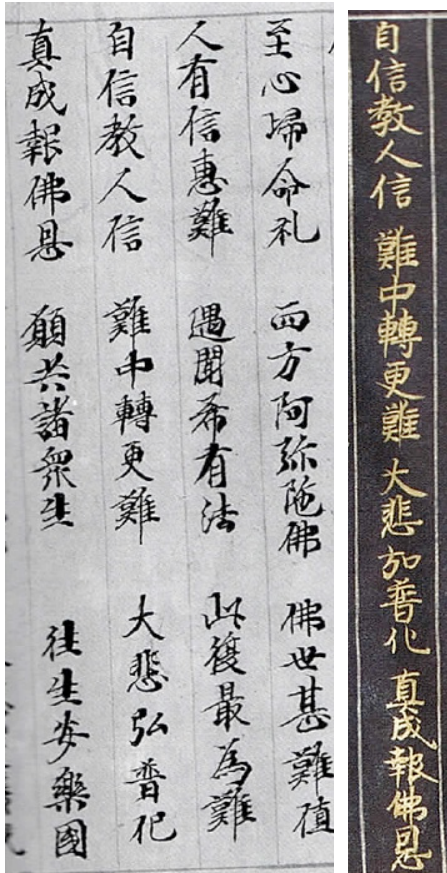
るが故に功德と名づく。」
頁中段)

(吉蔵の『勝鬘宝窟』『大正大藏經』37 卷 11

guṇa: 「紐を構成する條、紐、絲、綱；燈心、弓弦；琵琶の絃；二次的の食品、調味料；
(動詞の) 遠隔目的；固有性、性質；根本的源素(地・水・火・風・空)の属性(香・
味・色・触・声)；(特に *Sāṃkhya* に於て) 根本的(三) 原素又は性質…中略…根本
的(二十四) 原素又は性質…中略…善性、徳、功績、卓越；(一) の多額または多量(=
過分の)；発音上の特質(文字の)；母音の第一強階程、重韻…中略…倍数」(『漢訳
対照 梵和大辞典』427 頁) 「徳、功德、福德、道德、威徳；利、勝利、利益、功德、
功德勝利；実；美；仁篤；用」(同前)と漢訳される。

punya: 形容詞として「吉兆の、幸先のよい、幸運な、好都合な、美しい、快い；芳香
のある；善良な、有徳の、正しい、価値のある；純粹な、清浄な、神聖な」(『漢訳対照
梵和大辞典』791 頁)と定義され、「勝、福、善」(同前)と漢訳され、また名詞とし
て「善、徳；善行；道德的または宗教的功績」(同前)と定義され、「福、福德、福德
行、福行、福利、福慶、福業；功德：善根；善輪」(同前)と漢訳される。

七寺所蔵の智昇『集諸經禮懺儀』(左)と檀王法林寺所蔵本(右)の該当箇所



(『集諸經禮懺儀 下卷』(日本古寫經善本叢刊第四輯)96 頁(左)と 24 頁(右))